☆公害による健康被害を許すな!
☆自然環境・生活環境の破壊を許すな!

トキ
画：橋本正弘

大阪から公害をなくす会ニュース

大阪から公害をなくす会
〒540-0026 大阪市中央区内本町2-1-19
内本町松屋ビル10 370号
TEL 06-6949-8120
FAX 06-6949-8121
E-mail : oskougai@coast.ocn.ne.jp
URL http://oskougai.com/
発行責任者 芹沢 芳郎
年間購読料一部2,000円(送料共)
郵便振替 00910-7-300387

『人手が本当に足りていない』

青年が震災ボランティアで感じたこと

日本民主青年同盟大阪府委員長　伊木 知史

民青大阪府委員会では、震災後「何とかしたい」「何かの役に立ちたい」という青年の気持ちを募金活動などにつなげてきましたが、今回はその思いを、ボランティア活動という行動に移しました。全国の呼びかけに応え、男女20人の青年が、5月2日から4日までの3日間、宮城県の亘理町でボランティア活動に参加しました。

被災農家と心が通じ合う

亘理町のイチゴ農園は沿岸部から約4キロ離れた場所でしたが、津波の被害を受けていました。津波によって運ばれてきた泥を撤去し、枯れたイチゴやビニールシートを剥がす作業をしました。畑からは海水の臭いがし、魚の死骸が畑から何匹も出てくることに驚きました。厚さが12～3㎝、重さ2～3㎏ある泥を運んでは出しての重労働で、気の遠くなる作業でしたが、みんなで知恵を出しながら作業に取り組みました。

休憩中に、農園の方に状況を聞きました。イチゴ農園は、2月までの収入はほとんど支払いに消え、3月からのイチゴの出荷で1年分の生活費を得ること、しかし、今回3月11日に津波が来てすべてのイチゴが流され、今後の生活費が心配なことを話してくれました。また、100㍍1000万円もかかるビニールハウスが亘理町で450あったのに、津波で20ほどしか残っていない事もきいて被害の大きさを改めて実感しました。

作業最後の日は、一番大きなビニールハウスの泥の撤去を一通り終えることが出来ました。そして、最後の感想交流には農園の方も一緒に交流し、口数の少なかった農園の主人が、最後は涙を流しながら「必ず復活して、皆さんに報告します」と熱く語ってくれたのには本当にみんな感動し、心が通じ合った瞬間でもありました。

大阪で出来ることを考え合う

ボランティアに参加したメンバーからは、「何ができるだろうと不安を持ちながら参加したけど、被災地をみて何でもやれることをやろうと思った」「気が遠くなる作業は大変で、人間は無力だと感じていたけど、それを復興させるのも人間の力だと思った」「微力かもしれないけど、みんなが力を合わせたら現地の人たちも勇気を持てるんじゃないかと思った」など出されました。

また、「見たこと、感じたことを少しでも大阪の仲間に伝え、何が必要か一緒に考えたい」「被災地の方が展望を持てる補償を、国や自治体が責任を持ってすることが大事だと実感した。大阪からも世論作りをする運動を起こしたい」など、大阪で出来ることをみんなで考え合う事の大事さも出されました。

現地の状況を目の当たりにして率直に感じたのは、〝人手が本当に足りていない〟ということでした。沿岸部では、道路は通れるようになったものの、船や破壊された家、瓦礫はそのままで、津波の海水が地盤沈下で戻らないまま残っているなど、まだまだ復興の兆しが見えない状態でした。

(次頁最下段につづく)